

天 皇 杯 受 賞

集落全体でこだわりの有機農業 ～美しく豊かな有機の里～

受賞者 しもぎとのうち みず かんきようほ ぜんこうじようたいさくいいんかい
下里農地・水・環境保全向上対策委員会

さいたまけんひきぐんおがわまち
(埼玉県比企郡小川町)

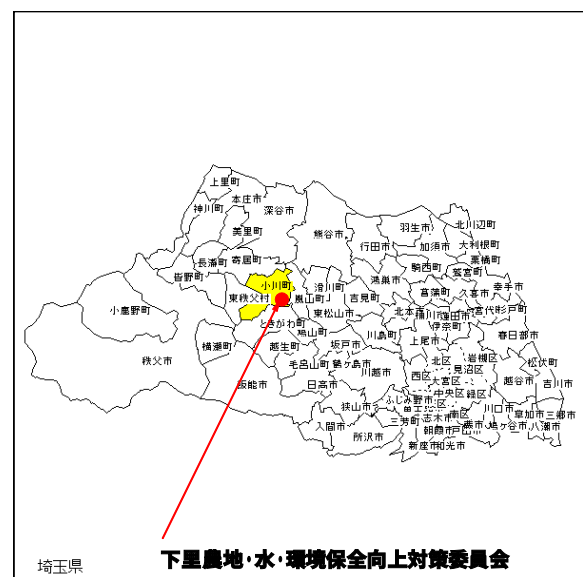
■ 地域の沿革と概要

小川町は、秩父山地の東側に広がる丘陵地帯。東京から60km圏に位置し、交通の便に恵まれ、都内へ通勤する住民や自然を求めて週末に訪れる都市住民も多い。

1300年の歴史を誇る小川和紙や小川絹をはじめ、酒造、建具等の伝統産業で古くから栄えた町である。

農業は主に、平地では各地域の水系毎にブロックローテーション方式で水稻・小麦・大豆が、丘陵地では露地野菜が、山沿い地域では切り花や枝物等の花き園芸が営まれている。

第1図 位置図



※ 白地図 KenMap の地図画像を編集

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

下里地域は、小川町の南東に位置する。周囲を山に囲まれ、山裾を流れる^{つきがわ}槻川によって涵養される農山村地帯である。水田ではブロックローテーション方式で水稻・小麦・大豆が栽培され、畑では主に自家用野菜が栽培されている。山林は、戦後造林された針葉樹林と国蝶オオムラサキの生息する広葉樹林が残されている。広葉樹林では、しいたけの原木が養成され、落ち葉は堆肥化して農地に還元している。地域のハイキングコース沿いには農家ボランティアが守るカタクリとニリンソウの群生地があり、ウォーキングに訪れる観光客も多いなど、里山の恵みが人々の生活の中に息づい

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集 落
地区の性格	機能的な集団等
農 家 率 (内訳)	7.5%
	総世帯数 11,711戸 農 家 数 882戸
販売農家数 (内訳)	397戸
	専業農家 54戸 1種兼農家 37戸 2種兼農家 306戸
主要作物 (農業産出額)	水稻 (160百万円) 野菜 (140百万円)
農用地の状況 (内訳)	耕地計 701ha 田 275ha 畑 409ha 樹園地 17ha 耕地率 11.6% 農家一戸当たり農用地面積 0.8ha

ている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 地域を悩ませていた問題

住民たちは、昭和63年からのほ場整備を契機に地域の将来を話し合った。ほ場を整備して大型機械を導入できるようになったとしても、個々の経営面積が小さなままでは採算が取れない。農産物価格が低迷する中でこれまでのように米や麦・大豆を作っても経営としてやっていけないことが問題だった。

平成12年から水田農業経営確立対策により本格的な麦・大豆の生産が求められることを知った当時の下里地区機械化組合の組合長^{あんどう}安藤^{いくお}郁夫氏は、地域全体で付加価値の高い農産物生産を目指し、有機農業に取り組むことを提案した。背景には当時、下里地域で30年来有機農業に取り組んでいた金子^{かねこ}美登^{よしのり}氏の存在があった。



写真1 下里農地・水・環境保全向上対策
委員会役員
(前列中央：安藤代表、前列右から
同2番目：金子副代表)

イ 住民の戸惑いと全体の合意を得る困難

もとより金子氏を「何か変わったことをしている人」と遠巻きに見ていた住民は戸惑った。農薬を使わなければ病害虫が多発するのではないか、農作業の手間が増えるのでは、と不安を訴える住民もいた。かつて地域では、農薬の空中散布やゴルフ場建設を巡って混乱する場面が多くあった。過去を知る関係者は、地域全体の合意を得る難しさに再び直面していた。

ウ 命が巡る金子氏の有機農業

金子氏が営む霜里農場には、有機農業に対して住民が抱える不安と戸惑いを払拭するだけの技術と実績があった。同氏が有機農業をはじめたのは昭和46年3月、農業者大学の卒業時まで遡る。これからの農業は、安全でおいしく栄養価のあるものを作り、豊かに自給していくことではないかと感じ、手探りで病気や害虫と闘った。アクシデントと我慢を繰り返し、土から土へ命が巡る自然循環の農場を作りあげていった。

エ 地域に広がる理解、そして決断

金子氏が育てる有機栽培農産物は、購入者の絶大な支持を受け、「高く売れている」と評判だった。また、有機農業を学びたい、農場を見学したいと訪れる人も多く、全国から若者が集まり活気があった。かつて地域で特別視されてきた同氏に教えを請うてみようとの決断には、勇気も必要だった。不安や戸惑いを持っていた住民も、同氏の取組と

実績を詳しく知るうちに、徐々に心を開き理解を広げていった。

地域を良くしたいという人々の想い、そして長年孤独な闘いを続けてきた同氏の地域の役に立ちたいとの想いが一つになり、ともに手を取り合う時が訪れた。

オ 有機農業の広がり地域環境問題

平成13年から地域ぐるみで大豆の有機栽培を始め、続いて小麦と水稻の有機栽培に取り組んだ。

次第に地域全体へ有機農業の取組が広がっていくと、農地だけでなく地域全体の環境にも目が向いていった。高齢化が進んで管理が十分に行えなくなっている土地や水路、ゴミの不法投棄や鳥獣による被害もあって地域の環境が悪化していた。

地域の環境をどのように維持するかなどを考えていた時、19年度から農地・水・環境保全向上対策が始まることを知った。19年5月に「農地・農業用水等の資源や農村環境を守り、質を高める地域共同の取組と、環境にやさしい先進的な営農活動を支援すること」を目的に「下里農地・水・環境保全向上対策委員会」を設立した。

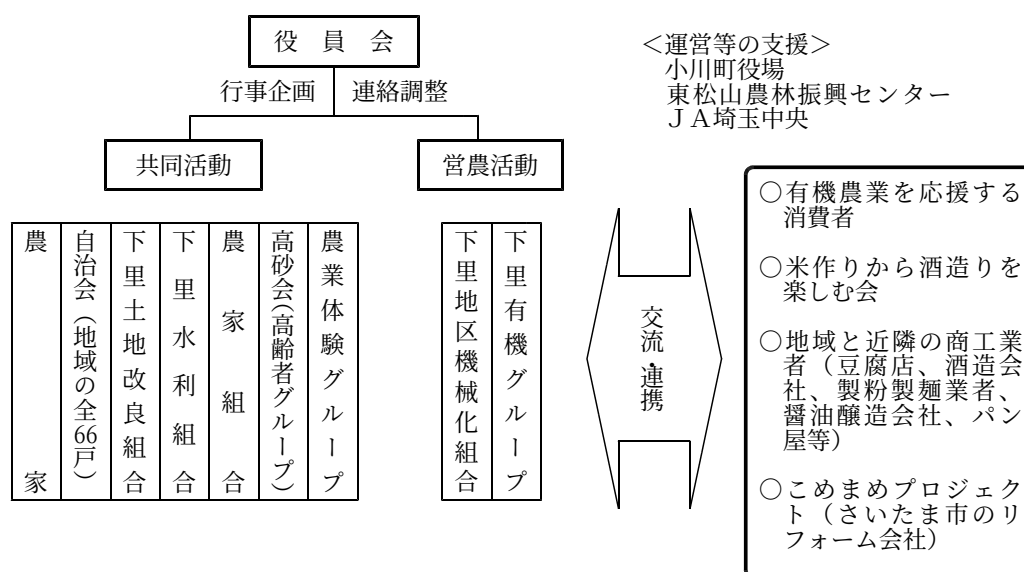


写真2 有機農業で集団栽培する大豆

(2) むらづくりの推進体制

19年以降のむらづくりは、下里農地・水・環境保全向上対策委員会が中心を担っている。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

はじめは「点」であった有機農業が、下里農地・水・環境保全向上対策委員会の活動により地域ぐるみの「面」的な取組となって大きな実を結んでいる。多くの支援者にも支えられた地域全体での取組によって有機栽培された農産物の全量が再生産可能な価格で現金取引され、地域全体に活気が生まれた。また、個々の農家や住民の意識が高まり、「地域の環境を美しく保全しよう」、「地域の資源を活かそう」と、自らが考え行動するようになっていること。そして、様々な取組を通して地域のまとまりを強めながら、「かけがえの無い宝」であるむらの景観を次の世代に受け渡したい」との想いを具体化していることが大きな成果である。

2. 農業生産面における特徴

(1) 地域全体で取り組む有機農業の成果

下里農地・水・環境保全向上対策委員会の営農活動区域では、ブロックローテーションで、水稻（21年は898a）、小麦（同434a）、大豆（367a）を集団栽培している。エコファーマーは年々増え、21年度に販売農家26戸すべてが取得した。

栽培方法を統一し、有機質資材として主に剪定枝チップを利用して堆肥を作り、土壌診断と堆肥の効率的な散布等を共同で行った結果、小麦と大豆では小川町の慣行栽培を上回る単位当たり収穫量を実現している。

(2) 支援者に支えられ、みんなが豊かに

下里地域で有機栽培された農産物は、「有機農業を支援しよう」、「有機農業で頑張っている農家を応援しよう」という近隣の商工業者と消費者に支えられ、その全量が慣行栽培以上の価格で取引されている。取引契約にあたっては、「全量を、再生産可能な価格で、現金で買い取ること」を条件にしている。高価格での取引は、農家に元気とやる気をもたらすとともに、経営の安定に大きく寄与している。支援者の想いと高価格に支えられ、年配者からも「農業が楽しくなった」との声が聞かれるようになった。また、収益の向上によって下里地区機械化組合の経営が安定化したことから、コンバイン等の農業機械を自己資金で更新することが可能となり、自立した担い手組織としての位置付けが高まっている。

こだわりの農産物を作って、こだわりの商品を作り、こだわりのわかる消費者に買ってもらふことによって、生産者をはじめ、商工業者や消費者、地域までもが豊かになっている。

(3) 在来大豆「青山在来」の復活とこだわりの豆腐店での活用

かつて下里地域で栽培されていた在来大豆「青山在来」は、収量性が低く経済栽培から切り捨てられていたが、晩生種のため開花期が遅く害虫の被害を軽減できるなど有機栽培に適していた。また、糖度が高く甘みがあるという利点を持っていた。

この甘みに注目した豆腐店があった。大量生産で1丁数十円で売る低価格の豆腐づくりに疑問を持ち、素性のわかる原料を使用した安心感のある豆腐づくりへと経営を転換させた隣接地域の豆腐店だった。下里地域で復活させた青山在来の全量をこの豆腐店が

引き取ることになり、安定した販路が確保できた。

(4) 水稻の有機栽培と広がる支援

農薬を一切使用しない水稻栽培は雑草防除が難しくなる。様々な技術を学びながら、アイガモ除草、機械除草（田打ち車）に加えて、米ぬかやくず大豆の利用、深水管理による防草技術などを取り入れている。有機栽培した米は、日本酒の需要が減少する中で「特徴」を求めていた小川町の酒造会社の希望と合致した。地元の土地でできたものへのこだわりが、有機無農薬米純米酒「おがわの自然酒」となった。こだわりは瓶のラベルにも現れ、地域伝統の小川和紙が使われている。（写真3の中央）



写真3 下里の有機農産物から生まれた商品

この酒造会社と霜里農場が協力して、17年から消費者を交えた「米作りから酒造りを楽しむ会」を始めた。消費者と家族、子どもたちも一緒に年間を通して農作業を楽しんでいる。

さらに有機栽培米は、地域に新たな支援者を導いた。企業が果たすべき社会貢献を考えていた、さいたま市のリフォーム会社が「こめまめプロジェクト」を立ち上げた。有機農業とその生産者を支援する理念と社員の食料を確保するという観点から、下里地域の有機栽培米（21年3～9月分として1.8トン。10月には新米3.6トン）を一括購入し希望する社員へ提供している。

(5) やる気あふれる担い手たち

有機農業への理解と支援が広がる中、こだわりに徹した営農活動が進むとともに、農業に楽しさを感じる担い手が育っている。

金子氏の農場で研修を受けた若者が下里地域のみならず、近隣地域で就農したケースも多く、志を同じくする仲間が集まった「小川町有機農業生産グループ」としての取組も広がっており、若い人たちのやる気が地域をさらに盛り上げている。

(6) 資源を地域で循環させる仕組み

「すべてのものは土から土へ永遠に循環する」、「食料もエネルギーも自給する」という金子氏の考えに沿って、地域で資源を循環させる取組が進められている。有機農産物を使う商工業者が加工時に生じた残さやおから等は、下里地域に設置した発酵槽に運ばれる。そこで発生したメタンガスは炊事等の燃料に、バイオガス液肥（メタン発酵液）は追肥等に利用している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 地域環境保全活動

共同活動として、①生活道路の砂利入れ、②側溝の泥上げ、③除草作業、④河川敷の

ゴミ拾い、⑤あじさいやヒガンバナ等の景観形成作物の植栽を地域住民全体で計画的に取り組んでいる。広域に及ぶ河川敷の除草作業は、下里地区機械化組合員を中心に大型機械を使って効率的に行っている。

農地や水路の環境保全は、土地改良組合と水利組合を中心に、①用水堰の補修、②用水路の泥上げ、③草刈り、④ゴミの除去、⑤鳥獣被害点検等の活動を行っている。

(2) 地域を美しくしたむらづくり活動の成果

河川敷は、ゴミの不法投棄が絶えず、住民を悩ませていた。共同活動による地域ぐるみの清掃とやぶの刈り込みなどによって周辺がきれいになると住民の意識も高まり、日常的にゴミ拾いや清掃作業等を積極的に行うようになった。また、日頃からきれいにすることで、ゴミの不法投棄が大幅に減るという効果が得られている。

美しくなった水辺を散歩に訪れる人が増えた。「せっかく来てくれた人々が休めるところがあれば」との思いから、里山の間伐材を使って住民たちがベンチを手作りした。散歩の途中にベンチで憩う人々の姿が見られ、やすらぎと交流の場になっている。やぶを刈り、手入れをした場所に、地域にかつて自生していたヒガンバナが復活し始めた。秋に地域全体が真っ赤な花で囲まれるのを楽しみに、共同作業時に畦畔や水路脇に球根を移植している。

19年の大雨で取水堰が損壊した際、地域住民の力・地域のまとまりが強くなってきたことを実感した。地元の山の石材を使い、重機オペレーターの技術を持つ地域住民の力によって迅速に堰を修理・改良し、洪水被害の回避と取水の安定化が図られた。



写真4 住民たちが石を積み重ねた堰

(3) 有機農業によって蘇る豊かな自然環境

地域内で有機農業が拡大し、慣行栽培でも農薬の使用を抑える栽培方法が定着してきた頃から、水田では10種類以上のトンボが見られるようになった。ホウネンエビやカブトエビも増えた。地域内の水路に砂利が流れないよう農家が間伐材で堰を作り、ホタルの餌のカワニナが棲める環境を再現したところ、ゲンジボタルとヘイケボタルが宵の水辺を舞うようになった。サワガニやホトケドジョウ、陸生ホタルのオバボタルやクロマドボタルなども年々増加してきている。

(4) 広がる都市住民との交流、地域外の人を温かく迎える住民

地域には、全国から多くの人が訪れる。有機農業の研修生や支援者、自然を求める都市住民など。住民は初めのうち、「部外者」に対する抵抗感が少なくなかった。金子氏の農場を訪れる若い人たちなどのやる気と元気にふれ、次第に誰でも温かく受け入れる住民の気質と心遣いが生まれた。

今年6年目を迎えた「米作りから酒造りを楽しむ会」や「親子米作りふれあい体験」(田

植えと稲刈り等に80名程参加)の農作業体験や収穫祭、河川敷でのウォーキングイベントなど、都市住民との様々な交流の機会も増えている。

また、農作業体験をきっかけに近隣へ移住してきた家族もいる。下里地域に新規就農や移住を希望する人も多いが、現在は農地も住宅も適当な空きがない状況である。

(5) 有機農業に自信をもった女性たちの生き生きとした取組

家族に安全・安心なものを食べさせたいと野菜を自家栽培していた女性たちがいた。「余剰野菜を少しでも提供できたらいいね」との思いが、「やってみよう」と盛り上がり、21年10月に手作りの小さな農産物直売所ができ上がった。

近所に住む5人の女性が野菜や果物を持ち寄り、「もともと余り物だから安くていい」と置いた農産物が飛ぶように売れた。お客さんは、地域外からがほとんどでリピーターも増えた。話好きな女性たちは、裏で休みながらお茶が飲めるスペースを増築した。地域のお年寄りも立ち寄る場所ができ、楽しい時を過ごしている。

現在、訪れる人々の期待に応えられるよう品揃えを意識しながら、野菜の収穫期を長くできないか、ハウス栽培はできないかなど、新たな営農活動を考え、笑顔の輪を広げている。この直売所は、その小ささからは想像できないほどの大きな活力を地域に与えている。